

対話を深める
IR活動 Interview

副学長・新任 IR教員対談

 副学長・教育推進部長
岡田 忠克
 OKADA Tadakatsu

 教学IRに
 寄せる期待

 教育推進部 特別任用助教
近藤 亮介
 KONDO Ryosuke

 教育推進部副部長・
 教育推進部教授
山田 剛史
 YAMADA Tsuyoshi

 2023
 4/26
 Wed

 千里山キャンパス
 尚文館7階 奥章ホールにて

学士課程レベルの質保証を積極的にサポートし、その集合体としての大学全体の質保証に寄与することを目的とし、データ収集に終始するだけではなく、その結果を教育・学習改善に活かすことを視野に入れた活動を行っている教学IRプロジェクト。今回は、副学長・教育推進部長・教学IRプロジェクトリーダー・人間健康学部教授の4つの顔を持ち、本学の教育に長年尽力されている岡田忠克教授と、4月に着任しフレッシュさ溢れる近藤亮介特別任用助教を交え、教学IRプロジェクト担当の山田剛史教授をインタビュアーとして本学の教学IRに寄せる期待について語り合った。

IR (Institutional Research) とのつながり

山田 岡田先生にとってのIRとはどういうものですか？

岡田 2016年から教育推進担当の学長補佐として、IRに関わっています。その中で、入学してくる学生が夢や希望をもってワクワクしながら大学に入学してきます。僕らも何十年前はそうであったと思いますが…、その学生たちが在学中も卒業したときも、卒業後も関西大学に入学してよかった、卒業してよかった、と思える関西大学であり続けたいといけな心掛けています。そのためには、本学の立ち位置を見直し、強みと弱みを把握していくことが必要で、エビデンスやIRのデータを収集して、それを分析して次の改善に役立てていくことが大事なのです。

本学の先生方や職員の方々がデータを見たときに、「ここをこう改善してあげたら学生のためになるかな」あるいは「いいことがもっとできるかな」という気づきのツールとしてIRを理解してほしいと思っています。また、学外に本学の良いところを発信していくべきであると考えています。本学のことをきっちり分析し、強みを発信していくこともIRの役割だと思っています。数年間、教育推進担当としてIRに携わっていますが、先生方や職員の方の皆さんの力で関西大学のIRは一定の高評価をいただいていると感じているので、それをこれからも続けていきたいです。

(→次ページへ続く)

副学長 × 新任IR教員



近藤 亮介 こんどう りょうすけ

■関西大学教育推進部特別任用助教。1989年福井県武生市(現・越前市)生まれ。2012年鹿屋体育大学体育学部スポーツ総合課程卒業。2014年鹿屋体育大学大学院体育学研究科体育学専攻修士課程修了。2020年神戸大学大学院人間発達環境学研究科人間発達専攻博士課程後期課程単位修得退学。専門は、健康・スポーツ科学(測定評価)。2016年鹿屋体育大学特任助教(大学教育再生加速プログラム担当)、2020年兵庫県立大学総合教育機構特任助教(教学マネジメント担当)、2023年より現職(教学IR担当)。

(→前ページより)

山田 近藤先生は本学に着任される前に、国立大学と公立大学で教学IRの仕事をしてこられました。どのようなことに注力されてきましたか？

近藤 元々の専門は健康・スポーツ科学で、特にスポーツ選手のパフォーマンスを測ることを専門にしてきました。教学IRではそこで学んだことを活かして、「学生の学習成果をいかに測るか」、そして「学習成果の向上にどのような要素が寄与しているのか」という点を意識して取り組んできました。最初に勤務した国立大学は単科大学で、次が公立の総合大学でしたが、どちらがやりやすいということはなく、それぞれに特有の課題があると感じました。特に総合大学では、様々な専門分野を超えて意見交換し、対話することの難しさがあると感じました。そういった経験の中で少しずつ、教学IRの仕事をしていく上で必要な力を身につけられた気がする。関西大学ではそれを活かしていきたいと思っています。

関西大学の教学IRにおける現在と展望

岡田 本学の教学IRは、ミドルレベル、学位プログラムレベルの改善にフォーカスしており、学部や執行部とやり取りをして、教育改善に努めています。ただ、IRとして少し弱かったのは、もう少し上のレベルの戦略や大学全体の大きな方向性を考えていくうえでのエビデンスの収集でした。それがなかなかできていなかったのですが、2020年から全学IRの仕組みができたので、これからさらに活動を前進させていきたいです。一方で、総合大学としての難しさもあり、一つの取組をするにしても、各学部、部局、事務局において、なかなか足並みが揃わない部分が少しあります。今後、マクロレベルの大学執行部がIRの必要性や取組から出てくるエビデンスや情報が「大学全体のこれからの大きな未来である」ということ、つまり学生の未来に役立てるための一つの取組だということを十分に理解を深めながらすすめていく必要があります。そのうえで、マクロ、ミドル、ミクロという現在うまく機能しているところをより連環させることができればと考えています。

山田 近藤先生は教学IRの実践に取り組んできて、スキル面での強みや興味・関心としてはどのようなものがありますか？

近藤 健康・スポーツ科学の分野で活動して得たスキルの中で使えそうなものは教学IRに応用しようと心がけてきましたが、不足するところは心理学などの分野からも学びながら実践してきました。例えば、心理学の分野でよく扱われる「目に見えない学生の能力を測る」ための技術を学びました。そうした技術を使って測定した内容をスポーツコーチングの領域で扱われる「能力を伸ばすための支援」の枠組みに落とし込むことで、教学IRの実践に活かそうとしてきました。測って終わり、とするのではなく、学生の能力を伸ばすためにどう測るか、という視点をもてたことは、自分の強みといえるのではないかと考えています。

山田 そんな近藤先生、本学の教学IRではどのようなことに挑戦していきたいですか？

近藤 先程岡田先生が挙げられていた部局ごとの連携など、全体の足並みが揃わないということは、他の大学でも経験しました。他大学の事例から感じたことや学んだことは今後に使っていきたくて。特にデータについては、人を説得する上ですごく強力な武器になることは間違いないと思うのですが、使い方や説明の仕方を誤ると、逆に部局間の分断を生むこともあると感じています。比べるためではなく、「対話」を促進するための道具としてデータを使っていけるように意識できればいいなと思っています。



本誌への期待

岡田 これまでの本学のIRの活動は、教員と各部局と大学執行部、教学IR室の関係性の中で取り組まれた成果であります。学生にもこのIRの活動が自分たちのためにどう役立っていくのかということの本誌を通して気づいて理解してほしいです。こういう文化のもとで、本学が学生と共に大学を創りあげる、そして学びの質を改善していくところに、重点を置きながら教育を進めていることを本誌から感じ取ってほしいです。IRの活動はものすごく専門性が高いので、各学部の先生方の中で、理解や温度差があり、学部の執行部の方にしかIRの活動の理解が届いていないこともあるかもしれません。しかし、実際の教育や授業を担当していただいている先生にとって、このIRの活動が色々なところでの支援につながっていること、教育の改善につながっていることなど、IRと直接話すわけではないけれど、本誌を手にとってヒントを得ていただき、PDCAがまわっていけば、IRの取組が前進して評価されていくと思います。

山田 頑張っってその気持ちを踏まえていきたいと思っています。

最後に一言、近藤先生からお願いします。

近藤 一人ひとりの先生方や学生の願いを汲み取るために、対話をしていく努力が欠かせないと改めて感じました。そのためにどのように調査を設計してデータを可視化していくのか、自分なりに勉強しながら、そして色々な先生方にもご指導をいただきながら取り組んでいければと思っています。

山田 岡田先生、近藤先生へ一言お願いします。

岡田 まずは山田先生はじめ教学IR室のスタッフの皆さんと仲良くなることです。ぜひ戦力になっていただきたいです。頑張ってください。

(教学IR室 西村 瑛皓)

教学IRフォーラム 開催!

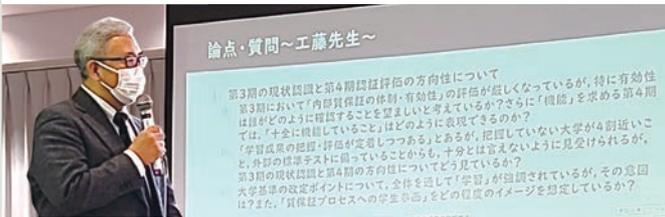
2023年2月18日、梅田キャンパスにて関西大学教学IRフォーラムを実施し、日本全国から101名の方々に参加いただきました。公益財団法人大学基準協会事務局長の工藤潤氏と学校法人東京家政学院理事長・筑波大学名誉教授の吉武博通氏を迎え、また、教育推進部の山田剛史教授と教学IR室の川瀬友太から本学の事例紹介を行ったほか、登壇者全員でのディスカッションも行いました。当日は様々な議論がありましたが、今回はその内容の一部を紹介します。



「教学マネジメントをいかに実質化させるか ～測定・可視化からその先へ～」

大学の質保証と認証評価 ～大学は認証評価にどう向き合うべきか～

[ご講演] 公益財団法人大学基準協会事務局長 **工藤 潤** 氏



認証評価制度は、大学の教育研究活動等の質保証と質向上に貢献することを目的として2004年に導入された制度です。認証評価という「質」とは、「学生が学習成果を修得できたかどうか」ということを指しており、大学は、内部で質保証のシステムを構築して、教育の充実と学習成果の向上を果たしていくことが求められています。認証評価機関は、大学のこうした営みを間接的に支えていかなければなりません。2025年度より始まる第4期認証評価では、以下の評価を行う予定です。

評価の内容

- 学習成果を基軸に据えた内部質保証の重視とその実質性を問う評価
- 大学の取り組みの有効性・達成度を重視する評価
- オンライン教育の動向を踏まえた調査

評価の方法

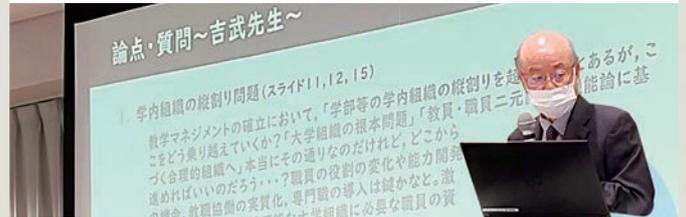
- 学生の意見を取り入れた評価
- 特色ある取り組みの評価
- 効果的・効率的な評価の実施

学習成果を基軸とした内部質保証システムにおいて、学習成果を可視化すること自体が重視されがちになっていますが、重要なのは、検証に基づく評価結果を教育改善に向けて実質化させているか、ということであると考えています。

最終的に社会から評価されていく大学に対して、認証評価を実施する側としては、常に大学に寄り添い、質的向上に寄与する評価を徹底させていきたいと考えています。

大学組織問題の本質と改革の道筋 ～教学マネジメントの実質化に向けて～

[ご講演] 東京家政学院理事長・筑波大学名誉教授 **吉武 博通** 氏



多様化する社会の中で大学は、その変化や課題に柔軟に適応した組織体制を構築していく必要があります。しかしながら、大学の改革が進まない状況も散見されており、その理由として以下があげられます。

組織設計上の問題

大学は「共同体的組織(学生と教員)」と、それを補完する「経営体的組織(事務)」の2組織にて発達してきたが、この2組織の組み合わせ(組織体系)の最適解が見出されていない

人材育成上の問題

運営する能力をもった人材を育てるシステムが未確立である

組織文化上の問題

「決定は教員、事務は職員」という文化がある

これらの問題に対応するためには、教員・職員の区別や役割を超えて、広く考える機会を設けることが重要です。全教職員が、質保証の本質について考え、大学組織がどのようなものであるべきかを考えて、「思い」をもつことが改革を行う上で非常に重要です。

また、DXの推進によって「見える化」が促進されています。改革を行う上で、これも非常に重要です。良い見える化は「気づき」「思考」「対話」「行動」を生みます。しかしながら「見える化」されるからといって、私たちはデータ偏重に陥らず、まず目の前にいる学生に目を向けなければならないと私は考えます。様々な文教政策の波はありますが、私たち教職員はまず「目の前にいる学生」を一番に考え、職務にあたりたいものです。

教学IRフォーラム当日の資料・動画は
(※学内限定公開)こちらWebサイトにて▶





開催告知リーフレット



フォーラム参加者の VOICE

(学生A)

学修成果の可視化が難しい反面、就職活動をする際に、社会は、「自分が何を学んだのか」を問うてきます。この状況のなかで、教育に関わっておられる方々が、**学生が何を学んだかを語る事ができる教育・研究を目指し、一生懸命努力されていることに感動しました。**



(学生B)

終始「学生」を主語に、学生のことを本気で考えてくださっていることが、私にとって本当に嬉しかったです。学生を一人の若者・人間として「**学び、成長し続ける存在**」として捉えることが大切であると学びました。大学をより良いものにしていくためには、**教員・職員・学生がそれぞれの役割の強みを生かしながら、フラットな関係で議論していく必要がある**と思いました。



(職員A)

「大学は評価されるために存在するのではない、**学生のために存在するのだ**」という吉武先生の金言が非常に印象深かったです。自分が何のために大学で働いているかを再認識させられました。



(教員A)

学修成果の可視化をしようとする際、複雑な分析ではなく「**学生について何を知りたいか**」を中心にして考える**大切さ**を学びました。



(職員B)

手段が目的化し、データ分析に主眼がおかれがちであるが、教育研究や経営の質を高めるために、どのような事実を知りたいのか、**そのデータによって最終的に何を達成したいのか(GOAL)が重要である**という、当たり前の事実に関眼しました。



(教員B)

教学マネジメントについて、**質保証の本質的な議論をせずに表面的なことに囚われすぎてきたことに気づきました。**認証評価で求められているのもその点で、**仕組みらしきものが整っていても機能していなければ(学生に向けた効果が出ていなければ)意味がなく、それが求められていることなのだと思われました。**



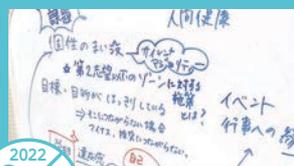
教学IR

ワークショップ実施報告



2022年12月15日、教学IRワークショップを実施しました。教職員が一つとなって本学の現状をデータで俯瞰して捉え、長所・短所を客観的に洗い出しつつ課題解決の方策を考える機会となりました。教学IRプロジェクトでは、このようなワークショップなどの機会を定期的に実施していますので、お気軽にご参加ください!!

「**関大の現状を知り、未来を考える**」



2022
12
15
Thu

千里山キャンパス
第2学舎1号館1階KITENE



◀ 教学IRワークショップ当日の資料・動画は (※学内限定公開)こちらWebサイトにて



『ここで見られないデータをお見せします!』



DATA ABOUT KANSAI UNIV 関大をデータから見てみよう!

…と、話題の生成AI

ChatGPT (Advanced Data Analysis) に尋ねてみた。すると…

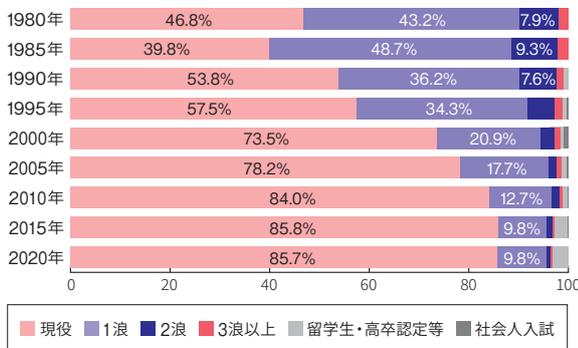


「了解しました。どのようなデータをお持ちで、どのような目的で分析や助言を求めているのか教えていただけますか？
データを共有する際には、個人情報や機密情報を含まないよう注意してください。安全なデータのみを共有してください」

…と、返答があった。

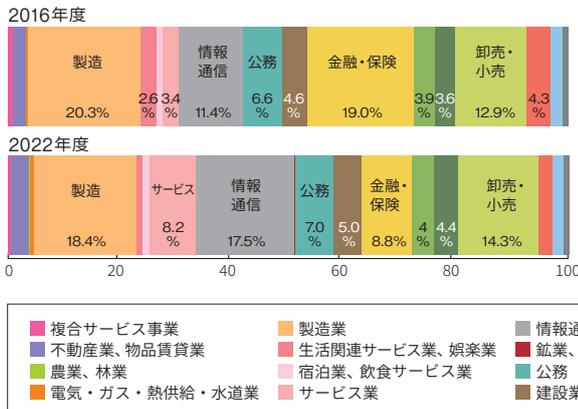
分析の目的をはっきりさせること、個人情報の取扱など安全管理を行うようにとアドバイスを受けた。加えて最近のChatGPTは「データを読み込ませれば、助言をします」とまで言う。データをChatGPTに取り込めば可視化・分析まで行ってくれる代物に、IRに取り組む方々は驚きを隠せないわけだが、大事なことに気づかされる。さて、どのようなデータを示せば、皆さんと対話が生まれるのか考えてみた。今回は、シンプルかつ分かりやすさを優先して、「入口(入学)と出口(卒業)の経年変化」を取り上げてみたい。以下、本学が保有するデータをもとに、BIツール「Tableau」で可視化したグラフを示す。

DATA 1 入学年度別 現役・浪人比率



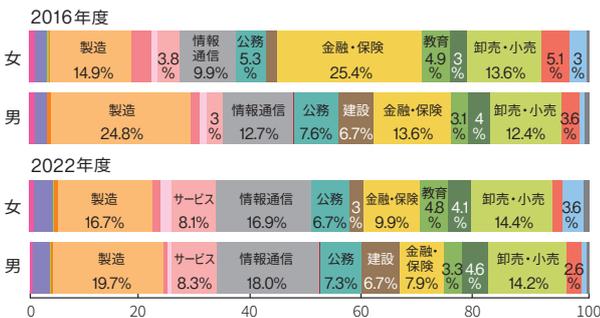
まず、入口のデータに注目すると、現役入学者と浪人入学者の割合の変化が顕著だ。1980年度入学者の半数弱(46.8%)が現役入学者であり、それ以外は浪人による入学者となっている。現役または浪人は、入学者のおよそ半々といった具合だ。それが2000年代以降に現役入学者が増え始め、2015年度入学者以降は85%以上が現役入学者となった。一方2010年度以降には、留学生・高卒認定等の入学者が徐々に増加したこともあり、この20年で変化を感じ取れる。ちなみに、筆者は2000年初頭に現役で大学に進学したが、4人に一人が浪人生の感覚だった。それが今は10人に一人といった具合だ。現役生が増え浪人生が減った背景には、経済的な理由、大学定員の増加、入試制度の多様化、少子化に伴う入学選抜の易化、高校での進路指導の変化などが考えられる。背景にある要因や社会の動きなどから、みなさんはこのデータをどう見るだろうか。

DATA 2 卒業年度別 就職先の産業別割合



続いて、出口の変化にも注目してみたい。出口は、「就職先における産業別就職割合」の変化である。短期的に見てもわかりやすいデータで、2016年度と2022年度に卒業した学生の産業別就職割合を比較してみた。6年の変化で顕著なのは「情報通信業」「金融業、保険業」「サービス業」だ。この間、情報通信業への就職が6.1ポイント、サービス業は4.8ポイント増加。一方、金融業、保険業への就職は、この6年で10ポイントも下がっている。AIなどデジタルテクノロジーの進化、生活面では情報通信会社などによるキャッシュレス決済の普及など、我々の生活の変化を感じつつ、6年の就職先産業の構造のデータをどう見るのか、皆さんの意見を伺ってみたい。

DATA 3 男女別(年度比較) 就職先の産業別割合



また、同じデータを男女別に集計してみた。2016年度には男女の就職先の産業に偏りが見られるが、2022年度にはその偏りが薄れ、男女の就職する産業の傾向が均等に近づいてきたことが確認できる。これらの背景には、学生のキャリア意識が変化したこと、ダイバーシティの推進など政策面が影響したこと、産業界の多様性や包摂性が高まったこと、社会全体の価値観が多様化したことなどが考察できる。多くの学生は、就職をして社会に出ていく。少し飛躍するが、こういった断片的なデータであっても、背景や文脈を読み解き、様々な対話を繰り返して学生支援や就職支援等につなげていければよいと思う。

冒頭で触れたように、生成AIはデータ分析も担当してくれる。現在はデータの安全性を確保するために分析は行っていないが、整備されたローデータがあれば、集計や可視化、それを自動で報告書にまとめる日も近い。プロンプトで分析プランを指示しながら作業を進めることで、より高度で効率的な分析が期待できる。こういった中で重要になるのは、データを中心とした対話やディスカッションの促進ではないだろうか。自動化により、データは人手よりも迅速かつ正確に生成される。集計などの作業は一行のプロンプトで完了し、得られた時間を対話やディスカッションに活用することができる。さまざまなデータを参考にして議論を重ね、IRによって大学や学生のことをより深く知りたい。そして、みんなでその理解を共有して、深めていきたい。

(教学IR室 川瀬 友太)

教学IR

これまでの
歩み

体制



取組



チーム

本学の「教学IRプロジェクト」は2014年に設置され、主にミドル(学部)レベルの教学支援を中心に活動がスタートします。実働メンバーは数名の教職員(兼務)になりますが、プロジェクトは大学執行部や局次長を中心に構成されています。また、プロジェクトの元に置かれているWGは全学の様々な部署にいる多くの職員と一部教員とで構成されるなど、教職協働によるネットワーク型で展開しています。その後、2020年にはマクロ(全学)レベルの教学IRとして「内部質保証推進プロジェクト」の下に「全学IR推進WG」が設置され、2022年に設置された「教育改革検討WG」と併せて、全学機能の強化・実質化に取り組んでいます。

少しずつ始まった各種取組ですが、今や入学時調査、卒業時調査に加えて、パネル調査、学生フィードバックシステムが全学部で導入されるに至りました。調査をして、報告書を作成して終わりではなく、毎年全13学部の教授会を回って直接報告し、意見交換やFDの場を設けるなど、改善に結びつけるべくフィードバックに力を注いでいるのも特徴の1つです。最近では、BIツール(Tableau)を活用した可視化・分析も組み合わせ、より訴求力の高いIR活動を施行しています。コロナ禍では、通常の調査に加えて独自の調査を設計・実施し、学生の学びと成長の実態を把握・分析し、授業の実施方針の策定や大学教育のあるべき姿について提言を行ってきました。



関西大学の教学IRチーム

2023年には、関西大学(全学)としては初めてとなる卒業生調査も実施しました。これから様々な形で分析・報告・公表しつつ、貴重なデータを活かしていく所存です。多くの教職員のみならず協賛しながら、全学(学部・研究科)のアセスメントプランの策定も行い、公表に向けて架橋に入っています。教学IRのさらなる展開として、統合データベース構築に向けた議論も進んでいます。また、教学IRの実績を踏まえて、経営IRも動き出しています。

膨大な量に亘る活動を語るには紙面が少なすぎますが、活動の根幹には、「学生の学びと成長を最大化するために、学生を知りぬくこと」が据えられ、チームの中で共有されています。毎週ある定例ミーティングは軽く3時間を超えますが、それでも課題は山積みで、やるべきことも留まるどころを知りません。ただ、私たちのチームはへこたれることなく、常に前向きに「関大生のために！」日々研鑽と挑戦を続けています。気軽にお声がけいただければ喜びます。

(教育推進部 山田 剛史)

編集後記

『IR TIMES』 創刊への想い

～ 編集後記に代えて～

山田 剛史



SNSなど広報媒体の電子化が進む中、紙媒体の広報誌を今更出す必要があるのか。もし、出すのであればどんなコンセプトにしようか。チームメンバーと編集会議を開いて何度も議論しました。結論は、1人でも多くの教職員あるいは学生のみならず「なるほど」「面白い」「IRの理解が深まった」「IRに興味を湧いた」「IRメンバーと話してみよう」と思ってもらえるものにしたいということです。年中走り回っているIRの取組をこれだけの紙面で伝えることは到底出来ませんが、その一端をご覧いただき、Webサイトを訪ねてもらったり、声をかけてもらったりと広がっていくことを願っています。そのためにも、私たちIRメンバーだけでなく、多くの教職員・学生のみさんの声や実践も紹介していければと考えています。突然お声がけすることもあるかと思いますが、その際にご協力賜われれば幸いです。

関西大学 IR TIMES Vol.1 創刊号

**Kansai University
Institutional Research Project
NEWSLETTER**

2023年10月20日 発行

編集・発行：関西大学 教学IRプロジェクト

〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35

TEL：06-6368-0230



🌐 <https://www.kansai-u.ac.jp/ir/>
✉ irstaff2@ml.kandai.jp

※本誌に掲載されている写真の
複写・転載を禁じます。